

## 生死を分けるとっさの判断について

10月31日、八丈島沖で転覆した漁船から生還した3人の船員の記者会見があり、その様子は当日夜のテレビニュースで報道され、また翌11月1日の新聞でも大きく取り上げられました。この人たちは、転覆した状態で浮いていた船のなかに閉じ込められてから4日後に生還したのですが、それはどうして可能だったのか、本人たちが言葉少なく語ったことに私は強い印象を受けました。

人の生死を分ける一瞬の出来事というものがあります。これについては、アジア・太平洋戦争の戦闘中には数えきれないほどの実例があり、空襲を受けた東京などでも似たような経験をした人が沢山いたはずで

す。

現代の日本は平時にあります。そこでは、人々が一瞬の出来事で生命を落とす可能性は極めて小さいと思われています。しかし、そのような可能性はゼロではありません。一瞬の出来事のなかで、生死を分けるとっさの判断を迫られることがあるのかもしれない。

八丈島沖の太平洋に出ていた第一幸福丸は、台風の接近により荒れる海にいたわけですが、船長も船員もさほどの非常事態だとは思っていなかったようです。船長だけが舵を取るため甲板上の操舵室にいて、船員7人は全て居住区と呼ばれていた船底に近い部屋にいたということは、平常の態勢にあったということでしょう。

その船が高波によって180度ひっくり返ったのですが、一瞬に転覆したことが船内に大量の空気を残すことに繋がったと言われています。これは3人の命を救うことになりました。

転覆した直後には、まだ居住区から外に出ることができて、7人のうち4人は船外に出たのですが、この4人は未だに発見されていません。外に出ようというとっさの判断は不幸に繋がるものでした。しかし、転覆した船の中に居続けようとは思わないのが普通でしょう。ただ、このとき、4人は救命具を付けてはいませんでした。救命具なしで荒れる海に出ることに躊躇はなかったのでしょうか。平坦ではない船底に這い上がることができても、掴まるものはなく、そこにずっといられるはずはありません。船外に出ようという気持ちは痛いほど分かることですが、救命具なしで出るとはやはり無謀な判断だったと言わざるを得ないと思います。

助かった3人も実は船外に出るつもりでしたが、偶然にも倒れた冷蔵庫が居住区から外に通じる扉を塞いだために、出ることができなくなり、暗闇の居住区に居続けるしかなくなりました。その時の恐怖感は何れほどのものだったのでしょうか。しかし、彼らは救援を待つことにして、狭いながらも水に浸からない空間を作り、そこに体を寄せ合って横になっていたのです。この冷静な措置が3人の命を救うことになりました。

---

た。

何時のことだったのかは分かりませんが、出口を塞いでいた冷蔵庫が自然に移動して、また外に出ることは不可能ではなくなったそうです。そのとき、3人のなかで一番若くて船員歴の短い1人が外に出ようとしたが、船員歴の長い他の2人が止めたそうです。これは見事な判断でした。また、先輩の判断にしたがった若い船員も立派だったと思います。

こういう重大な判断は、どうすればできるようになるのでしょうか。3人はとくに教育があるようには見えず、口数の少ない普通の人たちのようでした。自分たちの命を救うことになる決定的な判断を誤りなくできたことには、この人たちの穏やかな性格に加えて、経験からくる知恵というものがあつたからでしょう。教育は知識を増やすことはできても、知恵を授けることは難しいと思います。知恵は一人ひとりが経験によって得るしかないのではないのでしょうか。

現代社会では、知識を増やす機会には事欠きませんが、知恵を身に付ける機会は意外に少なくなっているような気がします。とくに日本ではそうだと思います。知恵が希薄になっていくことは、人々の生活、更には国の将来を危うくするでしょう。国民の知恵を確保することは、今後の日本の最大の課題になるのではないかと思います。

(おわり)